慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	経済文献解題 一千八百八十三年版フランシス・ デーヴィ・ ロング著 ヂョーヂ氏の「進歩と貧困」及びミル氏の賃銀理論の批判的検討
Sub Title	
Author	高橋, 誠一郎
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1939
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.33, No.12 (1939. 12) ,p.1633(117)- 1647(131)
JaLC DOI	10.14991/001.19391201-0117
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19391201-0117

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

Report on the revenue system of Cuba. 1932.

本稿の執筆に當りセリグマン教授のゼミナアルに學ばれた慶應義塾大學講師松野喜内氏及び金融研究會經濟學博士大館堯壽氏の教を辱なくしたことを感謝する。

經濟文獻解題

一千八百八十三年版フランシス・デーヴィ・ロング著『ヂョーヂ氏の「進歩と貧困」及びミル氏の賃銀理論の批判的檢討』

高橋誠一郎

一

フランシス・デーヴィ・ロング（Francis Davy Longe）の名は專ら其の賃銀基金說排擊に由つて經濟學史上に記憶せられてゐる。賃銀基金說は凡そ一千八百二十年の頃から同七十年の交に亙る五十年間、英國經濟學界に於いて承認せられて居つた所のものであり、而して此の期間を通じて此の學說が一般に行はれて居つた事實は當時の經濟學說をして勞働階級の間に不評ならしむるに與つて頗る力があつたと言はれてゐる。這般の賃銀學說に對して攻擊を加へた最初の英國人は實にフランシス・デヴィ・ロングであつた。

ロングは一千八百三十一年を以つて生れ、一千八百五十年より五十四年に亙つて牛津大學に學び、此の間に於いてジョン・スチュアート・ミルの經濟哲學に興味を有するに至つた。彼れは一千八百五十八年、辯護士の資格を得、幼年勞働調査委員補（assistant commissioner of the Children's Employment Commission）に任命せられ、大企業家

と接觸し、賃銀問題に關する實際家の意見を知るの機會を得た。是れ等の人々の中には勞資間の關係に關するミルの理論を知悉せる教養ある人々も居つた。彼れは次第に賃銀基金説が謬妄の見であることを確信するに至つた。彼れは一千三百五十年以來、條例及び普通法が職人の結合を取り扱つて來た態度の發達を略述せる An Inquiry into the Law of Strikes. を一千八百六十年劍橋及び倫敦に於いて出版したのであるが、任を解かるゝに及んで、初めて其の賃銀基金説排擊論を系統化することが出來た。斯くて八十頁の短論篇 A Refutation of the Wage-Fund Theory of Modern Political Economy as enunciated by Mr. Mill, M. P. and Mr. Fawcett, M. P. は一千八百六十六年、倫敦に於いて上梓せらるゝことゝ爲つた。

ロングの意見に據れば、賃銀基金説は下掲の如き三個の理由に據つて抽象的原理としても尙ほ全然誤れるものである。（一）一定時に於いて、若しくは一定期間を通じて、一國に於ける勞働の賃銀支拂に充當せられ得可き資本若しくは富は、其の一般的富より離れたる確然たる基金から成るものでもなければ、又、勞働の購入の爲めに豫定せられた基金から成るものでもない。（二）一定時に於いて、若しくは一定期間を通じて、一國に於ける從屬若しくは勞働人口は勞働の供給、即ち彼れ等の間に一國の總賃銀基金若しくは資本が競爭によつて分配せられ得る勞働者の一體を組成するものではない。（三）斯くの如き賃銀基金が、勞働の賣手及び買手の自由競爭によつて――自由の作用が許さるゝならば――一國の勞働者（彼れ等が相互に競爭し得る「一般的」勞働者として論ぜられ得るとしたならば）の間に總べて分配せらる可しと做すの推定は需要供給原理の誤れる總念を包含するものである。(ibid., p. 22.)。即ち第三の點に關し、ロングは、ミルによつて表明せられたる需要供給原理を以つて其の賃銀法則の原理と矛盾するものと觀るのである。ミルに據れば、或る貨物に對する需要は其の購入せらる可き貨幣の分量ではなくして、購入者によつて欲望せらるゝ貨物其の者の分量である。然るに、彼れの賃銀法則は如何なるものであるか。賃銀は人口と資本との間の比例に依賴すると云ふに在るのである。(ibid., pp. 30-32.)。フォーセットの勞働基金説と需要供給原理とは等しく相容れざるものである。(ibid., 32 ff.)。ロングの意見に據れば、新しき財貨若しくは富の生産に使用せらるゝ間、勞働者等の維持の爲めに利用し得可き富若しくは資本は賃銀を限定する基金ではなく、彼れ等の仕事を購入するが爲めに利用し得可き富の高が眞の基金である。(ibid., pp. 47-48.)。

ロングは此の書を他の多くの人々と共にミル及び劍橋の盲經濟學者であり A Manual of Political Economy, 1863. の著者であるヘンリィ・フォーセット(Henry Fawcett)に一部づつ贈呈したのであるが、而も彼れは、ミルからも、フォーセットからも之れに對する禮狀を受け取ることが出來なかつた。ロングの批評は是れ等學界の權威者によつて全然默殺せられたのである。當時の經濟學界に於ける最大權威、ジェ・エス・ミルをして彼れが遂に賃銀基金なるものゝ存在を信ずることなきに至れる旨を言明せしめたものは、是れより三年の後に現れた其の親友ウィリアム・トーマス・ソーントン(William Thomas Thornton)の On Labour, its Wrongful Claims and Rightful Dues, 1869. である。(ソーントンが此の書の序文を認めたのは一千八百六十八年十二月三十一日であつた)。ミルはソーントンの攻擊の前に率直に降伏した。彼れは一千八百六十九年五月の Fortnightly Review. 誌上に於いて此の書を批評し、此の係爭問題に關するソーントンの意見を承認し、彼れの反對論は辯解の餘地なきものであると做した。(Mill, Dissertations and Discussions Political, Philosophical, and Historical reprinted chiefly from the Edinburgh and Westminster Reviews, 2nd ed., 1875, vol. iv, pp. 44, 46.)。斯くの如きミルの輕率なる降伏は、恐らく、常に其の親戚朋友に厚き彼れが、友人ソーントンの批評に對して個人的敬意を表し、之れに對して能ふ限

り讓歩せんとするの態度を示したのと、彼れの晩年に於いて其の注意が次第に社會問題に集中するに至れるに由る所が多かつたであらうと言はれてゐる。ソーントンの著書は、少くとも表面上に於いては、ロングの著に依賴することなきものである。然しながら、ロングは、ソーントンがミルの親友であり、又彼れ等が倫敦に於ける同一の役所（印度事務省）に居り、而して兩者は共に經濟問題に關する著者であることを聞知し、而して彼れは彼れ等が自己の小冊子を知れるの事實を曾つて疑へることなく、又是れ等知名の著者等が彼れの意見を採用せることを發見するを以つて欣幸としたのである。ミルの評論が『隔週評論』に現れて後、ロングは自己の小冊子『排擊』の殘本に「一千八百六十九年」と記せる新たなる表題頁とミルの改說に關說せる前文とを附し、裝幀を新たにして發賣した。玆に本書の重要性は一部の人士によつて承認せられ、經濟協會幹事（Secretary of the Political Economy Society）は彼れが此の小冊子の著者たることを認めて、倶樂部の正餐に於いて其の會員と會見するが爲めに彼れを招待するの敬意を拂つた。正餐の後、短い輕い會話が之れに關して取り交はされたが、彼れの『排擊』とミル及びソーントンの意見の變化との間の關係に就いては何等話題に上ることがなかつた。（ホルランダーに寄せたるロングの覺書及び書翰。A Reprint of Economic Tracts ed. by Jacob H. Hollander. Francis D. Longe on The Wage-Fund Theory 1866, 1904, pp. 4-5.）。

然るに其の後、ロングに對するソーントンの學說的依存關係は屢々問題化し、一千八百七十一年七月の Quarterly Review 誌上に現れた批評は、ソーントンが其の著『勞働論』の初版に於いて無斷にロングの『排擊』を採用したことを斷乎として言明してゐる。（ibid., vol. cxxxi, p. 229-263.）。而も、是れより數年の後、フランシス・エー・ウォーカー（Francis A. Walker）は「一千八百六十六年の小冊子（即ちロングの著を指す）の埋沒は十分にソーントン氏の辯明中に受け容れらる可き」ことを認め、而して這般の不快なる嫌疑より釋放せらるゝが爲めに「更らに其れ以上のものが要せらるゝならば、彼れ（ソーントン）の斯問題に關する論述の明かに低劣なることは彼れを釋放す可きである」と附言してゐる。（Walker, "The Wage-Fund Theory", in the North American Review, Jan., 1875.）。ヒフ・ダブルユー・タウシッグ（F. W. Taussig）の如きも亦、同樣に、「ロングは恐らくソーントンに知られて居らなかつたであらう」と述べてゐるが、「而も、賃銀に影響を及ぼしつゝあるものとしての供給及び需要の法則に關し、又、賃銀基金の明確性に關し、共に、彼れはロングからヒントを受けたかも知れぬ」と附言して居つた。（Taussig, Wages and Capital: An Examination of the Wages-Fund Doctrine, 1896, p. 246.）。

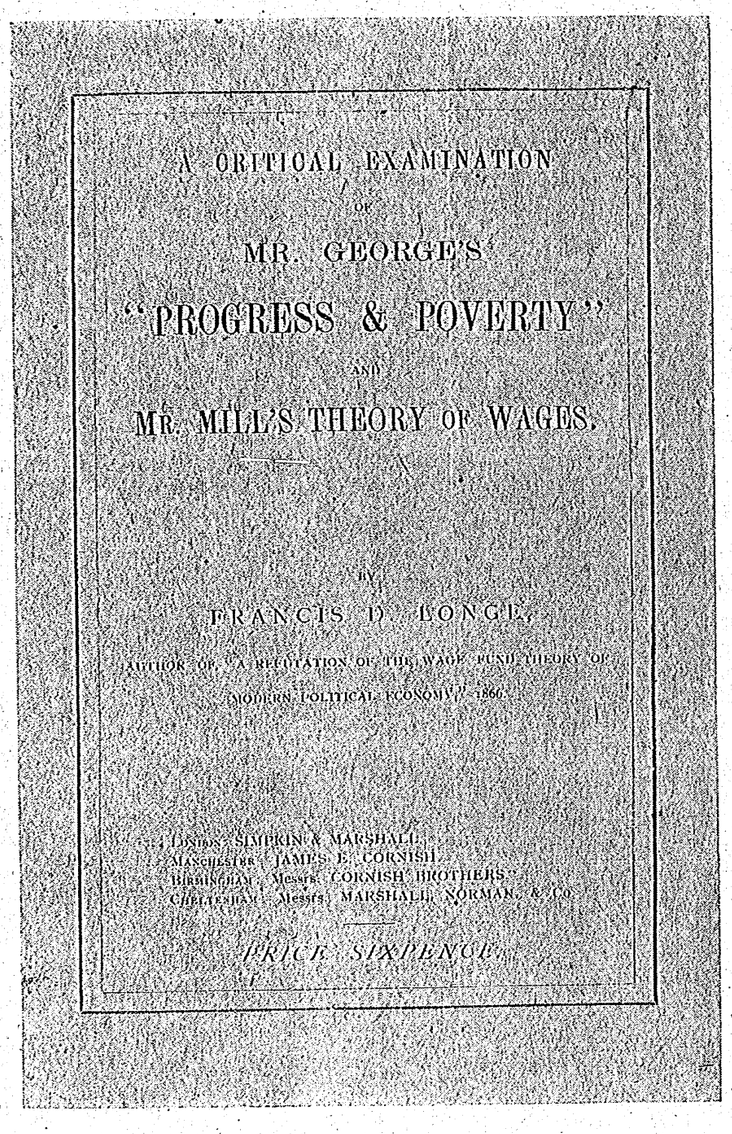
之れを要するに、ロングに對するソーントンの關係は不明の裡に埋れて居つたのであるが、ソーントンの死後（ソーントンの歿したのは一千八百八十年）に至り、ジョンス・ホップキンス大學經濟學助教授ジェカッブ・エーチ・ホルランダー（Jacob H. Hollander）が、一千九百〇四年、ロングの著の翻刻を企圖せる時、當時英國のローストフトに隱居して居つたロングは親しく編者に書を寄せて、「私はミル氏若しくはソーントン氏が一千八百六十九年に於ける彼れ等の發表以前に於いて彼れ等が私の小冊子を見たことを否認したと云ふ話を聞いたことは曾つて無かつた。然しながら、私はソーントン氏が、ミルの理論の不正確に關して、私の有したと同一の意見を、私の小冊子の出版せらるゝ以前に構成したと彼れが稱したと云ふことを聞いた覺えがある」と記してゐる。（Hollander, op. cit., p. 5.）。

ロングは一千八百七十年より同九十六年に至る迄、地方政府監察官の職を奉じて居つたが爲めに、學問研究に多くの時間を割くことを得なかつたが、一千八百八十三年、ヘンリィ・ヂョーヂ（Henry George）の Progress and Poverty, 1879. 中に存する謬見に憤激して、其の賃銀基金說並びにミルの其れを批判するが爲めに吾人が本稿に於

いて紹介せんとする短論篇 A Critical Examination of Mr. George's "Progress & Poverty" and Mr. Mill's Theory of Wages. を倫敦、マンチェスター、バァミンガム、チェルツンアムに於いて出版した。（ヘンリイ・ヂョーヂの賃銀論に就いては『三田學會雜誌』第二十六卷第十號所載拙稿『賃銀學說史上の收益說』五二九―五三〇頁參照）。

二

ロングは此の書の第一部に於いてヂョーヂの『進歩と貧困』を批評し、第二部に於いてヂョーヂ及びミルの賃銀基金に關する理論を檢討する。ミルの理論に從へば、賃銀は其の支拂はるゝ勞働の產物が如何なる部分をも形成することのない基金から支拂はれる。ヂョーヂの理論に從へば、賃銀は其の支拂はるゝ勞働の產物から支拂はれる。斯くてヂョーヂは賃銀基金に關する彼れの原理を下の如くに述べる。「各生產的勞働者は、其の働く際に、彼れの賃銀を造り出す。而してあらゆる附加的勞働者と共に、眞の賃銀基金に對する附加――概して言へば、賃銀の高よりも著しく大なる富の共同基本に對する附加が存する」。（George, Progress and Poverty. Book III, chap. i.）。ロングを以つて觀れば、ヂョーヂの述ぶる所は、資本及び資本家の兩者が勞働者をして富を生產するを得せしむるが爲めの手段として不必要なるを包意するの觀がある。斯くの如き原理叙述の態樣に於ける過誤は「勞働」若しくは「仕事」と「勞働の產物」との混同に存する。斯くの如く原理を叙述するに於いて、ヂョーヂは啻だに原料、仕事場及び其の他勞働者等をして彼れ等の勞働を寄與するを得せしむるに必要なる設備の供給に於いて雇主によつて演ぜらるゝ役割を無視するのみならず、彼れは勞働者をして「富」を生產するを得せしむる條件の理論から、其の職能の成功せる遂行の上に「富」を生產する勞働者の力が全然依賴する資本及び勞働の使用せらるゝ過程を指揮するに於いて雇主によつて演ぜらるゝ頗る重要なる役割を排除するものである。（Longe, A Critical Examination, op. cit., p.



A CRITICAL EXAMINATION
OF
MR. GEORGE'S
"PROGRESS & POVERTY"
AND
MR. MILL'S THEORY OF WAGES.

BY
FRANCIS D. LONGE,
AUTHOR OF "A REFUTATION OF THE WAGE FUND THEORY OF MODERN POLITICAL ECONOMY" 1866.

LONDON: SIMPKIN & MARSHALL.
MANCHESTER: JAMES E. CORNISH.
BIRMINGHAM: Messrs. CORNISH BROTHERS.
CHELTENHAM: Messrs. MARSHALL, NORMAN, & Co.

PRICE SIXPENCE.

39-40; cf., p. 6.)。

然しながら、ロングに從へば、ヂョーヂは這箇勞働者と其の雇主との間の關係に關する奇矯なる見解を重要なる眞理として誇示するも、而も、彼れは決して斯くの如き見解に自己を制限するものではなかつた。彼れは「資本」が何であるかに關する彼れの說明に於いて、又「資本の眞職能」に關する彼れの說明に於いて、又、彼れが「賃銀は資本より引き出さるゝに非ずして、勞働から引き出さるゝこと」を立證すると言明せる章其の者に於いて、全然這箇勞資間の關係に就いての理論と矛盾を來した。彼れは「斯くて、賃銀に於ける資本の支拂は之れに對して賃銀が支拂はるゝ勞働者による資本の生產を豫想する」と言ふによつて自己の過誤を暴露した。ヂョーヂの賃銀基金理論は斯くの如く表明せらるゝ時は、完全に正確なるの觀を有す可きである。製造業者が其の顧客に販賣するを得るが爲めに彼れの供給する原料より作成するが爲めに勞働者を使用する財貨若しくは完成品は、彼れが交換に於いて勞働者に與ふる賃銀と等しく彼れの資本である。斯くの如き雇主及び勞働者間の取引の見解に從へば、「勞働の產物」に代へて賃銀を支拂ふは單に資本の流通に過ぎざるものである。斯くの如き雇主及び勞働者間の取引の說明の主張する所のものは、賃銀の支拂に充當せらるゝ富若しくは資本はミルの說くが如く、失はれ、若しくは消費せらるゝのではなくして、單により大なる價値の富又は資本と交換せらるゝのである。(ibid., pp. 40-41.)。

「自然的」若しくは「相對的」賃銀法則は、相異れる業務に於ける一般的賃銀率を決定するものではあるが、あらゆる特殊の業務に於ける勞働者等が賃銀又は俸給に於いて毎週及び毎年取得することを得、又取得する實際の高を決定することがない。そは磅を決定するも志を決定することがない。實際的賃銀率は勞働の各特殊の種類の需要及び供給間の關係によつて影響せられる。貨物に對する需要が變動しつゝある交易狀態の下に在つて動搖するが如く、是れ等のものを生產するが爲めに要求せらるゝ勞働の價値も亦動搖する。而して、變動の範圍は自然的賃銀の法則によつて設定せらるゝ狹隘なる限界內に局限せらるゝものではあるが、而も、勞働者及び雇主の利益に於いて勞働の實際的價格の決定に際して解決せらる可き問題は――產物が販賣せらるゝが爲めに生產せらるゝ所に於いては――往々にして著しく複雜且つ不確定なるものゝ一であり、又、屢々兩當事者間に於ける爭議の主題たるものである。此の問題を決定する條件は、雇主及び勞働者間の爭議が仲裁に委せらるゝ際に、裁定者の裁決が形成せらる可き資料として彼れの前に置かる可きものである。這般の問題は、抽象科學の問題としては、賃銀基金の問題である。仲裁の實施は貨物の價格と其の生產に使用せらるゝ勞働者等の賃銀の間に直接の關係の存することを含意する。(ibid., pp. 41-43.)。

其の關係が何であるかはメーソン(Alfred B. Mason)及びレーラア(John T. Lalor)によつて與へられた「可能なる賃銀基金」の說明中に下の如くに表明せられる。「賃銀基金は斷じて資本家が甘んじて勞働と交換に與へんとしつゝある高を超過することを得ない。蓋し、彼れは賃銀に是れよりも以上を費すよりは寧ろ其の資本を使用することを廢す可きが故である。然しながら、資本家によつて支拂はるゝ賃銀は產物の販賣によつて彼れに償還せらるゝが故に、產物が愈々價値大なるに從つて、彼れは甘んじて愈々多くを勞働に代へて與へんとするであらう。是に於いて乎、產物が價値に於いて增加する時は、可能なる賃銀基金はより大なる可く、又、產物が價値に於いて減少する時は、可能なる賃銀基金はより小なる可きである」。(Mason and Lalor, Political Economy, p. 23.)。是れ等兩氏によつて叙述せらるゝが如き「可能なる賃銀基金」の理論はミルの其れとは著しく相違する。賃銀率、即ち勞働に對して支拂はるゝ價格をして既定の基金の高に依存せしむる學說と、一人の雇主が賃銀に於いて支拂ひ得る高を賃銀

の支拂はるゝ仕事若しくは勞働の價値によつて直接に影響せらるゝものと說く學說との間には重要なる相違が存する。後の原理中に包意せらるゝ仕事と賃銀との間の關係は、勞働者の提供する仕事の高及び價値と彼れの雇主が這般の仕事に對して支拂ふ能力との間に何等の連絡も存することがなかつたならば彼れの占む可き所のものとは雇主に對して頗る相違せる關係に勞働者を置くのである。然しながら、這般の學說はミルの賃銀基金理論中に直接包含せらるゝ所であり、而して這般の見解が猶ほ依然として有力であり、正統の學說と看做さるゝの觀あるが故に、ロングは斯くの如き頗る不當にして嫌惡す可き學說の因つて生ずるミルの體系に於ける誤謬を指摘するに努めんとする。(ibid., pp. 43-44.)。

三

ヂョーヂの著は此の年（一千八百八十三年）一月、Edinburgh Review 誌上に於ける The Nationalization of Land. と題する論文中に於いて評論せられた。評論家は賃銀基金に關するミルの學說を以つてヂョーヂの其れに反するものと看做す。ロングを以つて觀れば、勞働者等の「生計の資」が取得せらるゝ泉源に關してはミルの意見中に多くの眞理が存する。勞働者等は、他の人類と等しく、生產せられたるものを消費するものであつて、將さに生產せられんとする所のものを消費するものではない。ヂョーヂは、普通の取引の過程に於いては、勞働者等は彼れ等が其の賃銀の支拂はるゝ仕事を爲し遂げたる後迄は、彼れ等の賃銀を收受することなきを以つて爭ふ可らざる事實であると說く。果して然らば、彼れ等は慥かに這般の仕事の遂行中、彼れ等の雇主の資本によつて維持せられざるものである。勞働者は恰も其の勞働を購入する雇主に對して、あらゆる他の貨物の賣手が購買者に對して立つに等しき關係に立つものである。勞働者は、小賣商人が其の顧客の貨幣によつて維持せらるゝと云ふと何等異れる意味に於いて其の雇主の資本によつて維持せらるゝものではない。加之、ヂョーヂの說くが如く、勞働者によつて提供せらるゝ勞働の價値が之れに對して支拂はるゝ賃銀の價値よりも以上である可きことが、勞働の購入に資本を使用するの過程に對して缺く可からざるものであること、又、斯くの如き雇主の資本に對する增加が賃銀の支拂はるゝ以前に生ずることは眞である。ロングは之れを炭礦業に於ける過程によつて說明する。(ibid, pp. 44-47.)。這箇賃銀基金增加の理論はアダム・スミスの原理と一致するものである。(Wealth of Nations, Book II, chap. i)。(A Critical Examination, op. cit., pp. 48-49.)。

「賃銀は勞働の需要及び供給、或ひは屢次表明せらるゝが如く、人口と資本との間の比例に依賴するのである。人口によつて爰には唯り勞働階級の數、或ひは寧ろ雇はれて仕事を爲す者の數を意味し、又、資本によつて唯り流動資本、而も又其の全部にすら非ずして、勞働の直接購入に費さるゝ部分を意味する。然しながら、之れに對して資本の一部を形成することなくして勞働と交換に支拂はるゝ總べての基金を附加しなければならぬ。兵士、家僕及び他の總べての不生產的勞働者の賃銀の如きが是れである。不幸にして一國の賃銀基金(wages-fund)と稱せられ得る可き所のものゝ總體を一の有りふれたる名辭によつて表明するの方法は存することがないのである。而して、生產的勞働の賃銀は殆んど這般の基金の全部を形成するが故に、より小にして、より重要ならざる部分を看過し、賃銀は人口及び資本に依存すると云ふの常である。這般の表明法を使用するは便宜ではあるが、而も是れを以つて省略せる所あるものであつて、完全なる眞理の精確なる叙述として看做さる可きものでないことを記憶しなければならぬ。斯くの如き名辭の制限を以つてすれば、賃銀は啻だに資本及び人口の相對的の高に依存するのみならず、競爭の支配下に於いては、あらゆる他の物によつて影響せらるゝことを得ざるものである。賃銀（固より一般率を意味

する）は勞働者を雇傭するに使用せらるゝ總基金の增加によるか、若しくは雇傭に對する競爭者の數の減少によるかの外、增加することあり得ざるものであつて、又、勞働に支拂ふが爲めに供せらるゝ基金の減少に由るか、若しくは支拂はる可き勞働者の數の增加によるか孰れかの外、低落すること能はざるものである。（Mill, Principles of Political Economy, Book II, chap. xi, § 2.）。

ロングに從へば、斯くの如き章句は明かに雇主と勞働者との間に於いて時々處々に生ずる契約の結果と是れ等契約の條件に影響する事情との混同を包含する。「其の國の資本」なる概念は勞働者の雇傭に「使用せられ」若しくは「費さるゝ」「總基金」に對する同義語として、又「其の國の人口」は「雇傭に對する競爭者」及び「支拂はる可き勞働者」に對する同義語として現れる。洵に、此の章句は奇怪なる誤想の混同を含意する。（一）そは資本を勞働に對する「需要」と同一視する、斯くの如きものは需要及び供給原理の完全なる誤解及び誤述を包含する觀念の混同である。一の供給額が賣却せらるゝ價格を決定すると想像せらるゝ一貨物に對する「需要」は欲望せらるゝ同一貨物の數量であつて、他の貨物の數量ではない。ミル自身は其の論篇の後の部分に於ける其の需要及び供給原理の說明に於いて、這般の意味を「需要」に歸與する。（Mill, op. cit., Book III, chap. ii.）。（二）そは一國內に於ける勞働の有りとあらゆる供給に對する需要を決定する事情を、其の國內に存する事情に局限するのであるが、而も、吾人の最も重要なる生產的職業の或るものに於ける勞働に對する需要を決定せる事情が其の勞働の產物に對する市場が影響せらるゝ諸外國に存在しつゝある事情であることはあらゆる人の知る所である。（三）一國の特殊の職業に於ける賃銀率が一國內に於ける勞働の全部的供給及び之れに對する全部的需要の高によつて規制せらるゝを得可しと做すの概念は、加成的總和の全部をして其の組成せらるゝ各項目の高を決定せしむるものに等しき觀念の混同を包含する。（四）一國の種々なる職業に於ける勞働の現實的價格を一國內に於いて切に雇入を求めつゝある總べての勞働者の一般的競爭によつて規制せらるゝものと說くに於いて、彼れは自然的賃銀の法則を勞働の市場價格、即ち現實的賃銀の法則と混同しつゝあるものである。彼れは實に二個の全然相異れる原理を一の公式に結合せんことを努めたのであつた、而して其の必然の結果は無意味の畸形を生み出すに在つた。（ibid., p. 50-52.）。

ロングは斯くの如きミルの賃銀法則を以つて彼れの「資本」に關する誤れる概念に基礎を有し、又、其の中に包含せらるゝものと觀、「生產」を「交換」より分離するの不條理を指摘し、而して、生產業に於ける勞働の使用は單に富に對する富の交換の過程に過ぎざることを主張する。ミルの體系中に表明せらるゝ生產理論に從へば、資本家の職能は、單に、勞働者等が其の生計の資に代へて彼れに提供する仕事の量若しくは價値に何等拘る所なく、資本の限定せられたる量をして彼れが其の取得し得る限り多數の勞働者等を維持せしむるに存するの觀があり、他方に於いて、使傭せらるゝ勞働者等の數は雇主の市場が要求す可き產物の數量若しくは其の賣らる可き價格に何等拘る所なく、彼れに對して自己の雇入を申し出でつゝある勞働者の數に全然依存す可きであると云ふに存するが如くである。然るに、眞の理論は、資本家を以つて、確められたる需要に應ずるの目的を以つて絕えず其の資本を使用し、斯くて又、利潤と共に、使用せらるゝ資本量の復歸を確保しつゝあるものと說き、他方に於いて、切に雇入を求めつゝある勞働者の數如何に拘らず、雇主は單に彼れが這般の目的を遂行するが爲めに要求する限り多くの者を使傭するに過ぎざる可し做すのである。其の買物の選擇に際して普通の購入者を指導すると同一原理の上に行動して、雇主は啻だに低率の賃銀と低廉なる勞働との間の相違を承認するのみならず、各箇の勞働者に對する彼れの支拂能力は其の勞働者が之れに代へて彼れに提供す可き仕事の高及び價値に依存す可きが故に、彼れは其の勞働者の能率が

より大なるに比例してより大なる賃銀を支拂ふことを得ると共に、又之れを支拂はんとしつゝあるであらう。(ibid, pp. 52-57.)。

四

本著中に現れたロングの賃銀理論は古典的經濟理論の中に潜む階級的對立關係の不可避を免れんとして、需要供給說の裡より、收益說が徐々に其の發達を見つゝあつた時代の產物である。ミルは彼れがソーントンの攻擊に屈服して後に於いても猶ほ、此の問題に關する最近の討議の成果は未だ經濟學に關する一般的論述中に編入せらるゝ迄に成熟せざる旨を言明して、其の『經濟原論』中に於ける賃銀基金說の說明に對して變更を加ふことがなかつた。(Principles, 7th ed., 1871, Preface.)。彼れの逝去後、幾許もなくジョン・エリオット・ケアンズ (John Elliot Cairnes) は其の Some Leading Principles of Political Economy, newly expounded, 1874. 中に於いて再び賃銀基金說を取り上げて之れを精査し、ロングの『排擊』に現れた所論に對しては、資本に對する勞働の關係によつて決定せらるゝ賃銀の一般率若しくは平均率の可能性を主張したのであるが、(ibid., Pt. II, § 3.)、而も、彼れは賃銀基金說の特徵を拋棄するに由つて、能く賃銀基金說を擁護し得たるものであり、之れに代つて賃銀學說上支配的地位を占むるに至る可き「收益說」は實に斯學說の再說者たる彼れの所論中にも宿つて居つたのである。而して單稅論者ヘンリィ・ヂョーヂは賃銀が資本より引き出されずして、勞働の產物より支拂はるゝものなることを主張するものであつた。ロングはヂョーヂの一般的主張の不條理を認め、其の提唱する救濟策が却つて進步に伴へる「害惡」を增加す可きことを認むるものではあつたが、而も其の賃銀論に於いては、大體に於いて、彼れと同一の方向に向つて進まんとせるものである。軈がて、賃銀は或る人が無地代地を耕作するに由つて生ずる產物によつて決定せらるゝと做すヂョーヂの意見に暗示を得てジョン・ベーツ・クラーク(John Bates Clark)の限界生產力說が現るゝことゝなる。

ロングの前著『賃銀基金說排擊』と本書との間には實に十有七年の歲月が流れた。其の間に於いて限界效用理論はウィリアム・スタンリィ・ジェヴォンズ等によつて確立せられた。而も、ロングは這般の理論を深く究めて、其の基金說批判を限界生產力說に迄進展せしむることなく、僅かにメーソン及びレーラアの如き今日では最早學界の記憶から消え失せた二流以下の著書を引用して僅かに其の收益說の步を進めたに過ぎなかつた。彼れは其の舊著がホルランダーによつて翻刻せられ、其の名聲が經濟學界に甦つて後も、猶ほ暫く餘生を續けて、一千九百十年を以つて歿した。

彼れの一千八百八十三年の書は菊判五十八頁の小冊子である。爰には其の表紙を寫眞版として揭げる。